

イエスが弟子たちに向けて語られている福音書の中のみことばは、特別に、カトリック信者となった私たち、また、キリスト教の信仰を求めてカトリック信者になろうとしている私たちに向けて語られているみことばです。何故なら、私たちはカトリック信者となることによって、福音書の中の弟子たちのように、イエスを信じて、そのみ後に従おうとする者たちとなるからです。カトリック信者になるということは、イエス・キリストを信じてその導きに従う者たちとなるということです。そのような私たちに今日の福音のみことばは、どのように響いているのでしょうか。

今日の福音の中で、弟子のヨハネは「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、止めさせようと思いました。」と言っています。反省してみると、私たちも今の教会の中で、今日の福音のヨハネが抱いたのと同じような思いをもって、それを口にしていることがあることに気付かされます。イエスへの思いが強ければ強いほど、弟子たちの間のイエスの弟子たちとしての一体感も強くなります。私たちも教会への思いが強くなればなるほど、今日の福音のヨハネのような思いを口にしている自分に気付くことがあるのではないのでしょうか。ヨハネは「お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、止めさせようと思いました。」と言っています。ヨハネの目には、イエスの名によって悪霊を追い出している人が、イエスの弟子としての自分たちのグループに属しているかどうか、重大なこととして映っているのです。けれども、イエスにとって弟子たちのグループは確かに特別なものではあるけれども、イエスの眼差しは、弟子たちの狭い視野を越えてはるかに大らかに拡がっています。悪霊を追い出すというイエスがもたらされた神の国の目に見えるしるしが、イエスの名によって実際に行われているのであれば、イエスにとってそれはむしろ歓迎すべきことなのです。「わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。」イエスがもたらそうとしておられる「神の国」の実現に向けて、それに逆らわない全ての者は、わたしたちの味方なのだといエスは言われているのです。今の私たちの状況に引きつけて言えば、たとえば、大震災の被災地に入って活動する善意のボランティアの人々は、イエスのもたらされた福音に従って歩もうとしている私たちとともに歩む仲間たちなのだといエスは言っておられるのです。イエスの愛の教えは、私たちがそれに従うべき、私たちにとっての絶対的な基準で

あるけれども、イエスの愛の教えは、私たちの小さな教会の枠を超えて、はるかに人々の心に届いていることをイエスはその弟子たちとしての私たちに今も語りかけておられるのです。イエスのこのようなみことばによって、弟子たちがそうであったように、私たちも自分たちの狭さがもたらす息苦しさから解放され、肩の荷を下ろしたような解放感を味わうことが出来るはずです。

「キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いをうける。」イエスはこうも言っておられます。カトリック信者ではない御主人を家に残して、今日もこのミサに参加しておられる方もいらっしゃることでしょう。日曜日の朝、何も言わずに送り出してくださった、カトリック信者ではないお家の方々も、私たちが思っている以上に、このミサの中で私たちがいただいている神さまの恵みをいただいている、そのように受け止めたらいいのだと思います。宗教が違う私たちと長年一緒に暮らしているお家の方々も、私たちがそのことをどのように受け止めていようとも、イエスの目には、私たちに注がれている神さまの愛の中にいるのです。そんな思いに結ばれて、イエスに促されるようにして、お家の皆さんのためにこのミサの中で祈ることが出来たら素晴らしいことだと思います。

イエスのみことばは、時として、私たちにはとても厳しく思われることがあります。今日の福音の後半のみことばを、私たちはどのように受け止めたらいいのでしょうか。「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい」とイエスは言われます。イエスの目から見ると、弟子たちがそうであったように、私たちは皆、イエスを信じてその後に従って行く小さな者たちなのです。その小さな者たちの間にも、それが人間同士のグループであることによって、時としていざこざがあることを認めざるをえません。そのようなことを乗り越えて、イエスについて行くことが出来るほど、私たちは成長できていると言いがたいことを認めざるをえません。私たちは皆イエスに従う小さな者たちなのです。そのような私たちは、イエスが言っておられるような大ごとが私たちの間で起こることがないように、頭を低くしてイエスに願い求めたいと思います。どんな好い思いがあっても、それが仲間の誰かをつまずかせることになってしまうなら、それを胸の中に秘めておくことが出来るよう祈り求めたいと思います。所詮、私たちは皆イエスの前では、イエスにとってのかけがえのない小さな者たちなのです。

今日の福音の最後のイエスのみことばは、さらに激しさを増しています。

「もし片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。もし片方の足があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出しなさい。」これらのみことばによって、イエスは私たちにどのようなことを求めておられるのでしょうか。イエスのみことばをそのとおりに受け止めるとするなら、私たちは手足が何本あっても、目がいくつあっても足りない自分を認めざるをえません。今日の福音のみことばを、そのようにグロテクなものとして受け止めてしまうとすれば、私たちが福音書をイエスのみことばとしてではなく、書かれた文字としてそこに書かれた文字通りに受け止めているからです。福音書に書かれているイエスのみことばは、イエスが私たちに語りかけてくださるみことばです。

イエスが最も大切なこととして私たちの教えてくださったことは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい。」ということだったはずです。イエスの弟子たちのように、イエスの後に従おうとしている私たちに、イエスが求めておられることはそのようなことです。全身全霊を尽くして、イエスの教えてくださった道を、イエスに助けられ、導かれながら、どこまでもイエスに従ってついで行く覚悟を、今日の福音のみことばによって、イエスは私たちに求めておられるのです。そのイエスを信じて、イエスの後に従うために、片方の手や足、片方の目というだけではなく、わたしたちの全てをこのミサの中で、あらためてイエスにおゆだねしたいと思います。私たちの両の手足と目、わたしたちの全てを清めてくださって、それを、イエスの思い通りにお使いいただけるよう、頭を低くしてお願いしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高